

これまでの自治推進委員会での主な意見

1 現在の社会状況に関する意見

- 現在でもコミュニティセンターや各地域では、多くのお祭りやイベントを開催しており、学生も多く参加している。また、市民の参加も多いと感じている。多様なコミュニティはあると考える。
- 現在の社会情勢は、年代とライフステージにずれが生じている。若い世代には、学生やサラリーマン等が入るがサラリーマンでも家族や子どもが「いる・いない」ことで変わってくるため、難しい部分がある。
- 最近では近所付き合いが減ってきている。その中で、元気高齢者が増加している。
- 女性同士は、つながりが多いが、男性から子育て世代の母親にはつながりがなく弱いと感じる。

2 第六期自治推進委員会の提案内容に関する意見

- 第6期自治推進委員会の提案は、今後継承できるような提案にしたい。
- 図書館を利用している方も、コミュニティの中で、運営等の担い手になればなるほど、図書館に愛着がわいてくる。その感覚が大切である。また、自治を進めるためには資料のようなプロセスが必要である。
- 本委員会では、「気づき」と「きっかけ」というテーマで議論してもよいのではないか。

3 行政への市民参画や参画の手法に関する意見

- アンケートやパブリックコメントでは、案件によって参加数が変わってくると思う。自分にとって関心のある案件だと件数が多い傾向がある。
- アンケートやパブリックコメントは、市の計画がわかっている人しか参加しない。例えば図書館の閉館など自分の身近な問題については敏感であり、反応もしやすい。しかしながら問題は、図書館がどうやってできて、どのように運営されているのか理解が必要である。
- 今の「市民参画の方法」では、時間のある人しか意見を言わないことも多く、市民参画の方法の作り方が重要である。
- パブリックコメント等の市民の意見がどのように行政に影響しているのかも大切である。市民意見に対するフィードバックや変化が見られないと、市民も参加する意義を見出せなくなる。
- 今後は、行政と市民とのコミュニケーションの取り方を変えなければならない。
- パブリックコメントやアンケート等の参加を増やしたい場合、今後はインターネットの活用も考えられる。また、集計の際には、対象市民についてや母数等の詳細がわかるとよい。そうすれば、仕組みの改善につなげられる。

- 制度自体の説明会と制度を設計する際の実地説明会とは、同じ内容でも趣旨が違
う。この点を踏まえて今後議論する必要がある。
- 現状では、パブリックコメント等に参加している世代が決まっているように感
じる。自分の意見を出していない市民から、どのように意見を出してもらうのか
が重要であり、まずは、きっかけづくりが必要である。例えば、新しい世代（6
5歳以下の市民。特に子育て世代。）を取り込まないと変わらない。その世代を
どう取り込むかが重要である。
- 市のアンケート等もどのように告知していくかが重要である。紙媒体では費用
もかかるのでFacebookやtwitter、Lineなど、SNSを活用し呼びかけたらよ
いと思う。SNSの活用を広げていくことで、参加者が増えるのではないかと
思う。
- 市の説明会が、その場、その場で終わってしまっているように感じる。本来は
将来に向かって続けるべきものもあるのではないだろうか。また、1年に1度は、
ある世代を対象とし、テーマ絞った説明会等を実施したら面白いと思う。

4 イベント等、まちづくりへの参画やコミュニティづくりに関する意見

- まちづくりへの市民参画は、どんな入口からでも、入り方でも良いのではないかと
思う。
- どのようにコミュニティを広げていくかを検討する必要がある。
- 情報の動きから始め、人の動きへとつなげていけると良い。
- 市民参加の輪が広がるには、アナログである回覧板でも良いから、新聞を読まな
い人も伝えられる方法があると良いのでは。また、災害掲示板に平常時のお知ら
せもリンクできるようにしたら良いのではないかと。
- 子育て世代としても、まちのイメージが悪くなるよりは良いほうが良いと思う。
例えば、ハローキティやスタジオジブリなどと連携した取り組みができるとよい。
ワークショップやボランティア活動にキャラクターが来られるかわからないが、
キャラクターの印象もよくなると思うし、イベントや活動も盛り上がるのではな
いか。
- 現在、市内には、60歳代の世代が多くいる。その世代の人たちに何か行動を促
したら良いのでは。例えば、高齢者の人たちが、多摩市内の至る所でイベントを
やっていると思う。
- 60歳代の人たちは、積極的に活動している印象がある。発信力が弱いため、活
動が知られておらず、パイプ役もいないため参加者が少ない場合もある。繋げ
て・広げるパイプ役が必要である。
- 各団地で良い事業を行っているが、団地内で終わってしまっていると感じる。運
営者側のメンバー構成や課題、参加者サイドでの課題とは異なる視点が必要なの
で分けて考える必要がある。グループとしては、子育て母親グループ、そして定
年を迎えた時間に余裕のある世代とが考えられる。
- コミュニティセンターが実施している様々な活動を横に広げる必要がある。また、
参加対象を明確にする必要もある。子どもの祭りから受験、結婚、子育てと段階
ごとにテーマ設定をする。運営は時間に余裕のある世代にお願いできないかと。

- イベント等では、毎年、青少年問題協議会やP T A等各団体から数人動員されている。動員者が毎年変わるだけで、運営内容は変わらないため、運営のコーディネートが必要である。それがないと動員が義務になり、意欲低下につながる。
- コミュニティは、なぜ活性化しないのか。市の広報や発信の仕方などに問題があるのではないか。
- 長く定住している人が多い地域のイベントなどでは、新しく転入してきた若い人は運営に参加しにくい場合もある。
- 子どものつながりがあると、自然とママ友達はできるように感じる。子どもがいなくてもコミュニティを作ることができる環境の仕組みづくりが必要である。
- 若い人たちも、客として参加することは多い。ただ、運営側となると参加が少ない。
- グリーンボランティア森木会では、興味を持って教室に参加し、仲間ができる。入会のきっかけは、木の実に興味を持ったなど、単純である場合もある。どんなことでも「きっかけや興味」が大切であり、このような「きっかけ」の仕組みづくりができるとよい。
- 市内で紙飛行機大会など全ジェネレーションが参加できるイベントがあると盛り上がるのではないか。「伝える・つながる」を機能させることもできる。さらに、投稿広場などをインターネット上で開設するなどして、助けが必要な時に、地域で助け合いができるようにするのも良い。
- 地域にコミュニティワーカーがいると違ってくるのかもしれない。以前は、保護者たちのつながりが強く、そのつながりの上に保育園等のサービスがあったが、今はサービスありきで、保護者のつながりが薄い。例えば、保育士がコミュニティワーカーになり、意識して地域づくりをしていかないと、次につながっていかないと思う。

5 「たまおが行く」に関する意見

- 「たまおが行く」の全部は読まなくても、冊子の中の地図に載っているカフェやお店など、必要な部分だけ見る人もいると思う。
- 「たまおが行く」の内容は素晴らしいと思う。しかし、市全体に広がっていない。そこが問題であり、展開方法や活かし方が重要である。
- 「たまおが行く」にはヒントが詰まっていると思う。